

浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—

第 129 回 (2020. 2. 4) の要旨

拝読文(『真宗聖典』74～75 頁)

真人を殺し衆僧を鬪乱せんと欲い、父母・兄弟・眷属を害せんと欲う。六親憎み悪みて、それをして死せしめんと願う。かくのごときの世人、心・意俱に然なり。愚痴矇昧にして自ら智慧ありと以うて、生じて従来するところ、死して趣向するところを知らず。仁ならず順ならず。天地に悪逆してその中にして恚望僥倖す。長き生を求めんと欲うに、会ず当に死に帰すべし。慈心教誨してそれをして善を念ぜしむ。生死・善悪の趣き自然にこれあることを開示すれども、肯てこれを信ぜず。苦心に与に語れども、その人に益なし。心中閉塞して意開解せず。大命將に終わらんとするに、悔懼交わり至る。予め善を修せず。窮まるに臨みて方に悔ゆ。これを後に悔ゆるに將に何ぞ及ばんや。天地の間に五道分明なり。恢廓窈窕として浩浩茫茫たり。善悪報応し禍福相承けて、身自らこれを当く。誰も代わる者なし。数りの自然なるなり。その所行に依いて殃咎命を追いて縦捨を得ることなし。善人は善を行じて、楽より楽に入り明より明に入る。悪人は悪を行じて、苦より苦に入り冥より冥に入る。

「真人」という言葉があります。ここでは「しんにん」と読んでいます。『無量寿経』では、ここ一個所だけです。中国には儒教という教えがあります。孔子の『論語』を根拠にして、その学びと倫理的な価値というものが強く教えられているものです。

その中で、真人という言葉は、儒教の行者をさすもので、儒教の「仁・義・礼・智・信」の「仁」という概念に関連するものです。儒教の究極的な人間の理想の在り方を言おうとしているものだと思います。それが結局、仏教の「慈悲」ということとも関わるのです。そういう仏教的な価値観を受け入れながら、人間としてこうあるべきだという方向性を生きようとする人のことを真人(しんじん)というのです。

つまり真理を求める、それは儒教的な真理とは限らず、仏教的に言えば菩薩のようなものです。菩提を求めて生きようとするものを、ここでは「真人」といっているわけです。

「真人を殺し衆僧を鬪乱せんと欲い」というのは、そういう理想を求めるような人間を認めないで殺してしまうということです。仏教の「衆僧」とは、僧伽に入っている出家の僧侶のことで、そういう者たちを「鬪乱せんと欲い」と、争わせようと欲するのです。そして「父母・兄弟・眷属を害せんと欲う」。家族の中で自分にとっての両親、そして兄弟、更には眷属、「眷属」というのは、親族関係です。ここで「父母・兄弟・眷属」というのは、この『無量寿経』が編纂された頃は、当たり前のように、本当に親しく感じ合っている人間関係、信頼が濃い関係、お互いに何でもわかってきているような、そういう関係を「害する」、破壊してしまうということです。

そして、「六親憎み悪みて」と。「六親」というのは六親等ということになるのでしょうか。自分を中心にして、親と子どもは一親等です。そして祖父母、孫は二親等で、従兄弟になると四親等というふうにして、どんどん数が増えていくわけです。「六親眷属」という言葉もありますが、六親というものは六親等と言ってもいいわけなのでしょう。そういう眷属の関係を憎む。「憎悪」という熟語を憎み悪(にく)むというふうに、二度読んでいます。「六親憎悪し」というのを「六親が憎み悪みて」と読んでいます。

そして、「それをして死せしめんと願う」。「願令其死」の「其」、其れというものは、六親を表わすわけです。六親を憎む。六親に対して、自分にとって邪魔であったり、面白くなかったりと、何か様々なことが起こって、それを憎む。そして「死せしめんと願う」、その死を願うというのです。

「かくのごときの世人、心・意俱に然なり」。「かくのごときの世人」というのは、そのように自己中心的に、自我の骨頂みたいな行為をして、生きてしまう人間の在り方をいうのでしょうか。それをどこかで私は、「自分のことではない、自分とは関係がない」と言いたいのですけれども、親鸞聖人のお言葉に、「さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし」とありますように、こういうことを起こしてしまう存在が、われわれ凡夫なのだよと教えているのではないかと感じられるのです。

「心・意俱に然なり」について、「心・意」という言葉の「意」という方は、人間が意図的に、意識的になるということを「意」といいます。「心」の方は、「意」に比べて、もう少しぼんやりした感じでしょう。そういう二

ユアンスが「心」と「意」にはあるのだらうと思います。「心」も「意」も俱に、そのように自己中心的であるということです。

つづいて、「愚痴矇昧にして」と。「愚」は、「おろかさ」です。「痴」は、ここでは、「まだれ」に「知る」という字を書いています。これは、知り方に何か病があるという文字です。仏教で言えば、われわれが、まったく無自覚的になっている意識の在り方に、仏教が「無明」という言葉で教えているものが付いているということです。だから「痴」というのは、「貪・瞋・痴」という「三毒の煩惱」と言われる、煩惱の代表なのです。そういう人間存在の根本的な在り方を、「痴」という言葉で表わしているわけです。「矇昧」とは、「矇」は暗いという意味の字で、「昧」も暗いです。何かよく分からないという在り方です。「愚痴」の状態が人間を覆っている場合に「矇昧」ということになるわけです。

「愚痴矇昧」である。にもかかわらず、「自ら智慧ありと以うて」と。自分では賢いつもりなのです。「そんなこといわなくても分かっている」というふうに、自分で自分を賢いと思っているという在り方です。

そして、「生じて従来するところ、死して趣向するところを知らず」。ここで、大変大事なことが言われてきているわけです。清沢満之の日記（「臘扇記」）に、いわゆる仏教がいう諸行無常である命を、今ここに生きていますと感じ、考えている。が、その生まれて来たものが分からないし、行く先も分からないという表現があるのです。

「生死一如」と仏教では言うけれど、生まれて来たら必ず死ぬのであると。だから清沢満之は、「生のみが我らにあらざ 死もまた我らなり」と、「生きているというだけが自分ではない、死ぬこともまた自分なのである」と。そういう言葉をその日記に記述しているのです。そこに「自己とはなんぞやこれ人生の根本的問題なり」という言葉が出て来るのです。自分とは何であるのかということが、自分自身で分からない。自分が今ここにあるということは事実で、それは意識しているわけだけでも、意識しているその事実の根拠とは何なのか、どこから出て来た存在なのか、そして、どこへ行く存在なのかということが、自分には分からない。こういうことを表わしています。

これは他人事ではないのです。皆、そういう存在として今ここに与えられてあるのです。だから、特別に「愚痴矇昧」の人だけが、「生じて従来するところ」を知らないとか、「死して趣向するところを知らない」というわけではないのです。どれだけ賢い人であっても、世間的なことについては賢い人であっても、自分がどこから来たのか、そして、どこへ行くのか、そういうことについては分からない。このような問題があるわけです。

その次に、「仁ならず順ならず」。ここに「仁」と「順」という言葉が書いてあります。「仁」という言葉は、はじめに申し上げた「真人」を成り立たせるような、人間の理想的な在り方をあらわすものだけでも、人間が実践して「仁」が出来るようになるかといえば、まあ、難しいことです。「順」というのは、順応という言葉があって、状況に随順する。何かよくいえば、命が、ちょうど水が高きから低きに流れるがごとくに、自然の在り方に順っていくということなのでしょうけれども、これが人間関係の中にあると難しいものです。やはり人間として生きるということは、常に矛盾を抱えるのですね。ここでは、「仁ならず順ならず」という言葉で、人間存在というものが、与えられた状況に反逆するということが言われているように思います。

また、「天地に悪逆してその中にして悒望僥倖す」。「天地」とは、中国人の概念としては、人間生活を成り立たせているあらゆる環境、状況を表わそうとするものだらうと思います。つまり、「天地に悪逆」するとは、与えられてくるすべての条件に、「こんなのは嫌だ」と反逆する。そういう態度でいながら、「悒望僥倖す」と。「僥倖」というのは、幸せ、苦楽で言えば、楽を感じさせる在り方を言うのでしょう。それを希望すると。自分が反逆していることを忘れて、棚に上げて、「何とかして欲しい」と、自分に都合の良いことだけを願うということなのでしょう。

そして、「長き生を求めんと欲うに、会ず当に死に帰すべし」。「長き生」、「長生不死」というのは、中国人が求める幸せの価値概念の一つです。が、ここでは、「愚痴矇昧」の人間が、長く、自分に都合の良い生を求めようとしても、必ず死ぬのだよということです。

現代では、この長く生きるということが必要以上に大きな価値のようになっていきますね。長く生きるということの内実がほとんど忘れられて、長く生きさえすれば良いという、命を長くするという方向性だけが、世の中の関心となって動いている感じがします。

このことについては、少し問題があると思っています。私は、親鸞仏教センターのホームページにある「濁浪清風」という枠に、毎月短い文章を書かせていただいているのですが、たまたまそれが 200 号ということで、200 回目の記念のエッセイに、この「長生」について取り上げました。「長生きということだけが価値になっているけ

れども、果たしてそうなのだろうか」というような文章を記しました。

親鸞聖人は、本願の信という時に、信心の利益として「長生不死の神方」ということを言われます。「神方」とは、神の方法という、不可思議な最高の方法という意味があるわけですが、真実信心というものが、長生不死という願いにとっての何よりの方法なのだと書いておられるのです。

これは、文字通り、長生きができるということを言っているのではなく、やはり人間は必ず死ぬものである。「生死一如」ですから、生きるということは、死ぬことである。それは当たり前である。そこで、長生きをしたいという願いが本当に満たされるということは、どういうことなのか。ただ長生きをしたいということが満たされて、長生きをしてしまうということであったならば、それは内容がほとんどないのです。

そうではなくて、長生きがしたいと思っているけれども、その長生きの事実とは、今、一時一時を生きている。その一時が、かけがえのない時間として感じられるようなところの起こることが、要するに、長生きをしたいという願いが満足する最高の方法なのだ、と。

このように親鸞聖人は教えてくださっているわけです。その一瞬一瞬が、その時その時が、本当に充実して感じられるような時を回復するということに尽きるのです。そのことが、仏陀が、仏法の覚りを得たと言われ、その後の諸仏方が、これが本当の喜びだと言ってくださったり、親鸞聖人が、本願の信心こそが「長生不死の神方」だとおっしゃったりする。そういう意味なのではないかと、思うのです。

今ここに出てきている存在は、「愚痴蒙昧」の人間です。それに対して、「慈心教誨してそれをして善を念ぜしむ」。「慈心」は、慈しみの心で、「教誨」の「教」は教える、「誨」も教えるという字です。「教」の方は、「これを知ることにおいて意味があることだと教える」ということで、「誨」の方は、「これは間違っていることだと教える」と、そういう違いがあるようです。「それをして」の「それ」というのは、「愚痴蒙昧」の人間が、感じていたり、起こしてしまったりするものことで、そういう悪業を転じて善い行いをなさしめようとするということです。「愚痴蒙昧」の人間に善を求めさせようとして、教えようとするのです。

「生死・善悪の趣き自然にこれあることを開示すれども、肯てこれを信ぜず」。「生死・善悪の趣き」とは、「生死無常」の中で、善を為せば善が来て、悪を為せば悪が来るという因果関係を、「趣」という言葉で言われているわけです。それは「自然に」、ひとりでにそうなるのだよということを「開示」する、教えようとするのだけれども、「肯てこれを信ぜず」、全然それを信じようとしなないということです。

そして、「苦心に与に語れども、その人に益なし」。一生懸命に、その人のために、良かれと思って教えを説こうとすることです。努力することを「苦心」と言っているわけです。「ともに語れども」、言葉で語りかけるけれども、「その人に益なし」、効き目がないのです。

どうして利益がないのかというと、「心中閉塞して意開解せず」。「心」も「意」も「閉塞」していて「開解」しない。心の中に鍵が掛かったようになっていて、心も意も解放的でない、閉鎖的であるということですね。これは、なかなか難しい状況です。こういう在り方は、この頃の人間関係の中では随分と多いのではないかと思います。現代のサラリーマン生活などをしている方々は、自分の周りとは一緒に酒を飲んだりすることはあっても、気を許すことができない関係だといいます。自分を守ろうとするあまりに本当のことをお互いに言わない、そういう関係しかないということを聞きます。そうすると、鬱になったりするのも、ある意味で当然のことであるように思われます。

そして、「大命將に終わらんとするに」と。「大命」、これは命です。それぞれに与えられた、その命自身が終わろうとする時に、「悔懼交わり至る」。『観無量寿経』の下品下生にありますように、最終的に地獄が感じられるということなのでしょう。平気なつもりでいろいろとやってきて、いざ自分がそれで終わるという時に、先が分からない。死んだ後のことが分からない。悪業の結果が恐ろしいということが襲ってくる。後悔と懼れがやってくる。

ここの「悔」は、後悔です。そして「懼」は、「おそれる」という字です。キルケゴールという哲学者が『不安の概念』という文章を書いています。その中で、「恐怖」というのは、対象があつてそれが襲ってきたりすることをいう。それに対して「不安」というのは、何か襲ってくるというようなことがない、自分の存在が自分の思ったようにならなくなる感じだということです。そのように、心がおそれる在り方を不安という言葉で考えています。この「懼」はそれに近い感じですかね。

つづけて、「予め善を修せず」。それに到るまでに善を修するということをしなかったから、「窮まるに臨みて方に悔ゆ」。いよいよ行き詰まり、もうこれ以上はないとなった時に、後悔が襲ってくるということです。「これを

後に悔ゆるに將に何ぞ及ばんや」。しかし、後から悔いても、もう間に合わないのだ。と、そういうふうに教えられているわけです。

「天地の間に五道分明なり」。人間の生存が成り立つ状況を「天地」と言われます。その天地の在り方が、「五道」、五道とは、六道ともいい、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上を流転する迷いの在り方です。「五道分明」とは、そういう状況というもの、それぞれの行為をした結果が、次の自己を作っていくとかたちとしてある。すなわち、環境と自己とは常に一体であるという明らかな道理をいっているのです。

そして、「恢廓窈窕として浩浩茫茫たり」。「恢廓窈窕 浩浩茫茫」というのは、結局、私どもが、自分というものを感じて生きている、この空間も時間も果てがない。過去も未来もとても大きく、広く、深いのだけれども、それが自分にとって何であるのか、自分がどういうふうにあるべきなのかが、まるで見えないということを表わそうとしているのでしょう。

その中で、「善悪報応し禍福相承けて、身自らこれを当く」。「善悪」の「報応」、善をすれば善が来る、悪をすれば悪が来るという報いが、因果関係として応じている。「禍福」、禍と幸福が対応していて、それぞれの相を承けていくというわけです。「身自らこれを当く」と。そういう行為をした人間の身が、その自己自身が、行為の結果を引き受けることになる。ひとりで自分でこれに当たるということです。そして、「誰も代わる者なし」。「無誰代者」、誰も代わりに引き受けてくれる者はいないということです。それが「数りの自然なるなり」。ここでは「ことわりのじねん」と読んでいます。それは道理であり、自然であるのです。

「その所行に依いて殃咎命を迫いて縦捨を得ることなし」。自分で好きなように行為をすることの結果が、他者との関わりや、自然との関わりにおいて、禍や咎めとなり、自分自身に跳ね返ってきて、命を迫いかけてくるということです。それは、「命を迫いて縦捨を得ることなし」と。「縦」は、放つとか許すという意味を持っている字で、人間にとって「ほしいまま」というニュアンスがあるようです。つまりそれを、ほしいままに、放置したり、捨てたりすることはできないということでしょう。

「善人は善を行じて、楽より楽に入り明より明に入る。悪人は悪を行じて、苦より苦に入り冥より冥に入る」。このように、善人と悪人という価値観を手がかりにして、悪の在り方が徹底的に批判されるかたちで、教えられてきているわけです。それに対して「善人」、善を行ずるものは、「楽より楽に入り明より明に入る」と。幸せから幸せになっていくのだということです。「悪人」、悪を行ずるものは、「苦より苦に入り」と。結果は苦である。そして「冥より冥に入る」と。「冥」というのは、暗さを表わす文字のようです。冥土という言葉があるように、何かよく見えない。どうなっているのか分からない。真っ暗ならば闇と言えよいでしょうけれども、何か空間があるように感じられる。冥とは、よく見えないけれども、暗い。そういう在り方です。

親鸞聖人は、真実信心の利益として「現生十種の益」ということを言われます。その最初に「冥衆護持の益」というのがあります。「冥衆」という、見えないところから私どもを常に見ているものがある。われわれは、悪ばかりをしてきたことへのおそれがある。見えないものが恐ろしい形で襲ってくるという怖れがある。それを鬼や餓鬼、あるいは悪魔など、様々な言葉で表現しているのです。そういうものがあるがごとくに、人間の精神は感ずるわけです。特に、悪いことをするのは、暗闇から出て来るというイメージが強いのです。

昔の人は、本当に夜の闇が怖かったのでしょう。特に猛獣などは夜行性ですから、隙あらば襲ってくるという恐ろしさがある。まさに百鬼夜行の世界ですね。そういうふうに、冥衆というのは暗い世界からこちら側を見ているというのです。

ところが、その冥衆が護持する。冥衆が守ってくださるのだと。阿弥陀の光明に照らされて、本当の明るさが感じられるところには、暗闇の世界は手が出せない。そして実は守っていてくださるのだ、というふうに転成する。それは本願を信ずる真実信心の利益として、まず第一に言われていることです。これは、親鸞聖人の時代に精神生活をしている人々にとっては、大変な励ましになったのではないかと私は思うのです。

編集担当：菊池弘宣（親鸞仏教センター嘱託研究員）